「自由化」と稲作農家の論理および意味世界 ——北海道深川市メム地区での探求事例より——

Farmers' Decisions and Universe of Discourse in an Age of “Struggle for Existence”

徳川 直人*

Naohito TOKUGAWA

The following study attempts to find and describe the discourse practices of rice-growing farmers under the current political and economic conditions which force them to struggle hard to maintain their existence.

Saika or *Sabetuka* refers to the policy of dividing of rice into quality levels which are reflected in the price, rather than having all quality levels of rice blended and given a standard price. Accepting this policy, farmers' responses are quite mixed in their meaning. Some farmers see it as the necessary principle of the survival of the fittest in a free market situation lacking any responsible control by government. Others see it as a way of living together through the cooperative function of the differentiated parts of the division of labor. A qualitative sociological panel survey done on this as well as other points at Fukagawa city (one of the most productive rice fields in Hokkaido) has tried to reveal an aspect of the world of meaning held among farmers.

1. はじめに

この数年で我が国の農村・農業が体験した社会変動は、農家の中に一種の社会的不安⁽¹⁾を引き起こし、彼らの言説実践や意味世界にまでも深い影響を及ぼしつつあるように思われる。本稿では、その一局面に接近してみたいと思う。農家たちは現況をどんな状況規定で迎つつあり、現況は彼らの意味世界をどう変容させつつあるだろうか。対象事例は、筆者が1992年から聞き取りを継続している北海道深川市のメム地区である。

深川市は、北空知地方＝石狩川の中流域に位置する土壌肥沃な水稲作地帯である。「限界地のなかでの最優等地」(柳村、1996、19頁)⁽²⁾にあって、北海道では中堅的な7～8 ha層の農家が平均となり、そこに独自の気風や組織や運動が育まれてきた。メム(旧深川町)は、中でも特に優等地と見られる地域である。生産調整以前はほぼ水稲単作で、伝統的に「コメ一本」が語られ、「北海道随一の米どころ」との自負心が強い。「ゆーから」や「きらら397」など北海道米のエース銘柄を先取的にとりいれてもきた。その栽培をこなす農家の技術力や意欲また農

協への結集力もきわめて高い。大冷害で近隣農協が限度数量の3割から5割程度の入庫となっていた1993年11月初旬、深川市農協⁽³⁾では8割をこえる入庫率を記録していた⁽⁴⁾。生産組織の動向でも、これまで、生産組合の法人化や営農集団の結成など⁽⁵⁾、組織的なとりくみを示してきた。生産調整に対しても、過剰達成や個別農家の過剰投資を極力おさえ、「コメが基本」の原則を守ってきている。このような高い自負心・先取性・組織性・戦略性が、対象地を特色づけている。

報告するのは主に1996年調査の結果である。対象者は、同趣旨の調査だった1992年および1993年の調査と同じに(稲作が基幹の中核的と思われる農家の経営者52名を有意選出)し、若干の若手を加えた。この二つの時点の間に、「自由化」が現実のものとなった。これをはさんでのパネル調査により、それが彼らにとって持った意味をうかがうことができよう。次節のような理由から、回答の論理や意味に注意するため、設問はほぼすべて自由回答とした。調査員には概況把握や調査票設計の段階から参加してもらい、質問にも補足や追加の道筋を設け、柔軟な対話を心がけて、対象者の「語り」を引き出すよう努めた。有効回収票は34。有意選出でもあり、統計的な意味での代表性はない。

*北海道教育大学釧路校

図一 水稻経営戸数と平均経営面積の推移
(深川市メム)

2. 方法と課題についてのノート

いま述べた論理や意味への注意は、いわゆる「意識」を対象とした「社会心理学的」分析を意図するものではないし、「本当の意識」や「内面」を推量するための補足でもない。つまり本稿は農民意識論ではない。本稿が扱うのは外的に表明された言説ないし論理（語彙・理屈・喩え）である⁽⁶⁾。本稿の性格と課題を取って要約するなら、それは、どんな意見や行動が現況に適合的であるかについて農家が採用する（しうる・せざるをえない）言説なり論理の典型タイプをとりだしてみようとする一つの試論、ということになる⁽⁷⁾。

そのように試みる理由は、次のようである。第一に、社会学における（特に筆者もかかわるシンボリック相互作用論などからする）基礎概念の見直しがある。もっとも、当該分野でも長年の論争があつて端的な説明は容易ではないが⁽⁸⁾、ここでは次のように考えたい。行為者は、意識によって行為の方針を決定しているわけではない。意識を常に自由に言語化したり表明できるとも限らない。とくに問題状況や社会的不安状況にあつて、行為を左右するのは、また、行為の理由や動機を説明するとき述べられるのは、現況やその中の自分の利害や立場そのものがどんなものかの「解釈」や、それに付される「意味」である⁽⁹⁾。人々はそのような「状況規定」のために語彙を選択したり理屈や喩えを組み立てたりする存在であり、そうした規定は独自の水準で分析

対象となる。状況規定は、心的・内的なものとは限らない。それは外部に言及対象を必要とする。行為の調整や集合行為の構築のためには外的に表明・交換されなければならない。その内容は、対象世界の性質、言説空間の文脈やタイミングなどによって、影響や制約を受ける。つまり状況規定は、時と場と対象をもつ、それじしん状況化された営為である。だから、行為者の願望や欲求や「態度」とは、内容が異なる場合もありうる。が、それは心理の合理化やタテマエではなく、現実に行為を規制し決定する可能性をもっている⁽¹⁰⁾。

第二に、このような視点からする研究上の現況規定にかかわって、これまでの聞き取りから、筆者は、農家のいわゆる意識と状況規定の論理とが著しく乖離し始めてきているのではないか、という作業仮説をもっている。いや、従来は広く意識の範疇に含まれていたものから、状況規定の論理をとりだして区別する必要が生じている、と述べる方が適切かもしれない。たとえば、いわゆる自由化に「反対だが反対せず」といった回答は、意識の矛盾や虚偽ではなく、この乖離を示している。対話過程で「気持ち」を問うと「反対」が当然ながら、その意識を自ら否定するような回答が全く珍しくない。それが、農家の自己内部や農家間に深刻なコンフリクトを発生させている場合もある。そのことが、農民主体の現状に関する研究にとって重要な、現況の側面だと思われるのである。

この検討の際、どんな反応が典型かが問題となるが、パネル調査の過程で繰り返し出されるとか以前は見られなかったといった語彙の特徴と、その語彙が他の語彙と結ばれる理屈の様式や展開度合いを目安とした。だから最多数や平均では必ずしもないし（内容的には「極端」かもしれない）、むしろ研究者が肯定的に価値評価できるものとも限らない。

3. 対象者たちの概況

上記の主題とかかわり、経営の諸条件との関連も、最小限だが見ておこう。

（1）経営概況と状況規定の推移

図一は、深川市農協管内における近年の水稻経営農家の戸数と平均経営面積の推移を示したものである。1989年に267を数えた戸数は1994年には224

まで減少し、結果、平均経営面積は同じ期間に623.4aから712.1aまで増加した。この流れは図-2に示す対象者たち52名の経営でも同様で、1993年から1997年までの5年間で彼らの水田経営面積は848.3aから946.0aへと1haも増加した。が、水稻の作付面積はそれについてゆけず、聴取の1996年時点では伸び悩みか漸減の傾向にある。

1990年代前半、深川市は、コメ不足を背景とした減反緩和政策のもと、急速なコメ復帰をとげていた。1991年に2933haだった同市の転作等目標面積は、以後3年の各年、1726ha、1366ha、1180haと、半分以上に減少する。この措置は、前回調査で「運動が実になる時だ」「また転作を言われても、もうしない」といった回答が寄せられるほど強いコメ志向を、農家の中に生み出していた。緩和など「他の所ではできるわけがない」。それを実行してみせれば「やはりコメどころ」との認知が得られるだろう。しかも「自由化」の時代だ——そういった状況規定が成立したのである。結果、1993年の大冷害下ですら、「天気が悪いからとれないではすまない」「人災も7割……整備のミス」などとする回答が見られた⁽¹¹⁾。が、図-2は、対象者たちが再び転作に取り組み始めなければならなかったことを暗示している。それは彼らの目に「転作強化」と写るであろう。

経営規模の変化を階層別に見ると、図-3のようになる。各年次の経営面積順に対象者ナンバーをならべ、階層間の移動のみ斜線で結んだものである。7ha上層から9ha層付近で拡大の動きが目立つ。1993年の7ha層以下22戸は、うち12戸が1997年まで7ha以下にとどまった。同じ年の8ha層10戸は、後に2戸が縮小し、2戸が動かなかったが、6戸は上昇した。9ha層は、4戸が1997年まで同じ層にとどまったが、残り4戸は上昇して抜けだした。10ha以上層は、この5年間で12戸から倍近く22戸まで増加した。

拡大についての志向（上記した実際の増減とは異なる）を家族状況とあわせて示すと、表-1になる。52戸中、聴取が可能だった34戸のうち「維持」と回答した10戸は、7ha層以下が8戸、14haから15haの最大規模層が2戸であり、8haから9haは1ケースもない。「維持」の7ha層以下では、8戸のうち、7戸は経営者が55歳以上であり、6戸は後継者のメドがたっていない。「拡大」の7ha以下は、年齢が50歳以下であるか（54歳の例外は拡大を「2haくらい」と限定）、後継者層である。8ha以上の層は、最大規模で「維持」（つまり拡大済み）

注：深川市農協資料より作成

図-2 対象者たちの水田経営面積と水稻作付面積の推移

を除けば、すべて「拡大」の回答となっている。

前回調査では、拡大を志向するかどうかは、経営者の年齢と後継者の有無に、大きく左右されていた。今回もそれに概ね違いはないが、後継者が確定しているとは見えない50歳代の対象者も「拡大」と明言する場合が見られる。また、「年齢を考えると守り」とか「首をしめかねないが」とか「米価下げで判断は難しい」といった言辞とともに「拡大」が回答される例もある。さらに、前回調査で「いくらやっても10haまで」と回答していた対象者（当時5ha層）も、今回調査の時点には7ha規模の経営となっており、さらに「15haまでの希望は出している」。同様に、「2haくらい増やしたい。それが限度だ。あまり拡大すると農地が離散する」としていた対象者（当時7ha層）も、今回時点には「限度」の9ha層に上昇し、さらに「13～15町なら花もやめられる」。このように、対象者たちの「難しい」や「限度」という語彙の基準が異なってきているように見える。

しかし、規模拡大が水稻作付面積の増加とは限らない。対象者たちの平均転作率は、1993年には7.1%だったが、以後各年、7.0%、10.8%、15.7%、15.4%と揺戻した。水稻作付率で見ると、1993年には100%が対象者中に5名は数えられるが、1995年以降は一人も見られず、しかも85%前後で均等化されてきている。品目では、一時は消えていた小麦・大豆・ビートが1996年から復活し、継続されてきた小豆に加わった。一般野菜等も、1993年の対象者たち合計1733.4aが、以後各年、1916.6a、3532.7a、3295.8a、2918.9aと増加した。品目の数でも、1992年聴取では5品目の回答1例が最高

注：深川市農協資料より作成

図一3 対象者たちの水田経営面積の推移：1993－1997

表一1 対象者たちの拡大志向と家族状況

No.	年齢	家族状況	後継者の状況	経営面積	拡大志向
					「維持」
960035	33	本人+妻+長男+次男+長女+父+母+祖母	幼少	1465	維持。土地出ないし、機械代が必要で割に合わない。
960024	44	本人+長男+次男+父+母	長男・次男高校生	1534	維持。次男がやるなら拡大。米価下がり土地買うのはこわい。
969306	48	本人+妻+長女+次女+父+母	長男就学中	716	維持。
969308	51	本人+妻+長女+父+母	長男次男他出、長女就職	535	維持。
960026	55	本人+妻+長男+次女+母	長男就職	715	維持。割合として転作が増える。
960042	56	本人+妻+長男+次女+嫁+孫	長男手伝い程度	575	自分でやめれば現状維持。息子継げば拡大。10町程度まで。
969309	58	本人+妻+長女+次女+婿+孫	婿は農外就労	777	維持。国が補助してくれるなら拡大してもいい。
960041	60	本人+妻+長男+嫁+孫1+孫2+母	長男が後継	603	拡大せざるを得ないときが来る。すすんで買う気はない。
960002	60	本人+妻+母	長男・長女他出。	425	維持。6.5歳にはやめるつもり。
960027	65	本人+妻+次男+嫁	長男他出、次男兼業	772	維持。近場に土地あればやるが、そうまでしてやる必要もない。
					「拡大」
969432	28	本人+妻+父+母+妹+長男	本人アルバイト	470	拡大。理想は15-6町。
969404	30	本人+父+母+妹+祖父		730	拡大。15haまで。
969426	35	本人+妻+父+母 以下NA		1160	拡大。最低倍くらいまで。米一本にしたい。
969413	36	本人+妻+長女+次女+長男+母祖+母		1032	拡大。周囲にやめる人あるから黙ってても15haにはなる。
960004	36	本人+妻+父+母		720	拡大。15町まで。
960010	40	本人+妻+父+母+長男+次男	長男・次男高校生	625	拡大。水田で20町。
960032	40	本人+妻+長男+次男+父+母	幼少	1210	気持ちは拡大だが判断は難しい。せいぜい15haまで。
960038	44	本人+妻+長男+次男+三男+四男+父+母	長男以下就学中	938	拡大。12-3町。最終的に15町。米価下げで判断は難しい。
960016	44	本人+妻+父+長男+長女	長男が就農	1265	拡大。家族でできる15-20haまで。蔬菜にかかる労力にもよる。
969305	44	本人+妻+長男+次男+三男+父+母	長男高校生	1004	拡大。できれば20町まで。
960012	45	本人+妻	長女就学中	1165	拡大。よその仕事もしている。機械もOK。米一本にしたい。
960025	46	本人+妻+長女+父+母	長男・次男就学中	729	拡大。15町までの希望は出ているが、土地が出てこない。
969301	50	本人+妻+次男+三男+父+母	長男他出、以下就学中	657	拡大。来年、隣に土地を借りる。土地があればさらに。
960040	51	本人+妻+長女+三女+母	長女以下就職	964	拡大。設備投資せずとも共働で。13-5町なら花もやめられる。
960043	52	本人+妻+長男+父+母	長男が後継	1147	拡大。首をしめかねないが。家族でやる15-20町まで。
960007	53	本人+妻+母+次男+三男	長男・次男就学中	1505	拡大。5町増やしたい。20町で限度。売り上げ1500万に。
969304	54	本人+妻+父+母	長男他出、以下他出	556	少し拡大。2haくらい。後継者あればもっと。
969303	54	本人+妻+息子+母	息子就農	906	拡大。少しずつ。将来、今の倍あってもよい。
960008	57	本人+妻	長男・長女他出	955	拡大。来年1400aに。が、年齢考えると守り。20町にしたい。
960045	60	本人+妻+長男+嫁+母	長男が後継	1349	拡大。農産物の価格が下がっているから。今のところ米で。
960022	61	本人+妻+長男	長男に経営移譲	990	拡大。秋は機械化できても育苗で15haが限度。
960006	64	本人+妻+長男+嫁+孫1+孫2	長男が就農	998	拡大。あと3-4町。米価値下がりしているから収入のため
					「縮小」
960044	58	本人+妻	いない	530	縮小。後継者がいないから。いたら拡大したい。
960039	62	本人+妻+長女	長女就職	523	2-3年でやめるので縮小。体力に応じて小さくしていく。

注：深川市農協資料および1996年の職取による。

で、1品目だけの対象者も10名いたが、1996年になると7品目の回答2ケースをはじめ5品目も5ケースと増加し、1品目の回答は全く見られなくなった。こうして、表示は省くが、この5年間で経営面積が「維持」以下だった対象者では、例外なく水稲作付面積の「縮小」が生じている。加えて低米価の予想もあった。こうした事情から、所得維持のために拡大は不可避の課題だと判断が成立しつつあるのであろう。

もっとも、減反政策は、外延的拡大ばかりではなく、一種の複合志向をも、農家に生み出していた。すなわち、基本はあくまでコメだが、「高収益の畑作物がなければ、これからの農家は生き残れない」。だから「野菜に技術をつくしたい」といった判断である。次項では転作に対する反応について見てみよう。

(2) 営農志向と生産調整に対する反応

ここでは、水稲と転作に関する対象者たちの志向を、1992年調査とほぼ同じ指標により、次の四つに分類してみた。指標には、経営の実状に加えて、対象者たちの自己把握や自己規定に類する言が含まれている。その意味での「営農志向」である。

イ) 強い水稲志向——8ケースをここに分類した。指標は次のようである。すなわち、水稲と転作と雇われ仕事の比重を粗収入の構成比にした場合、転作部門が1割以下程度との回答がある。自由回答で、転作は「いやだ」「やめたい」など敬遠感が表され、とりくむ理由も「言われたから」のように他律的。選択回答で、「3. できればやめていくようにしたい」か「4. 情勢に対応するためのもので定まった方針はない」を選んでいる。典型例は次のようになる。すなわち、「転作は手間がかかって所得があがらない……息子までかからなければだめになる。働きに出た方がよい。転作は家族中がきりきりまい。腰おちつけてやるものではない」(7ha層、水稲：転作：就労＝1200：60：470、転作作物は小豆・燕麦、選択回答は3)。「今のところ転作があがらないので……現金収入のため。農協から言われているから。そういう雰囲気では従わねばならんかたち」(13ha層、水稲：転作＝9：1、転作作物は大豆・小豆、選択回答は4)。

ロ) 水稲志向——8例をここに含めた。転作にはやはり忌避的だが比重が1～2割程度にはなるとの回答。「マイナスよりはまし」など自己判断が加わっている。選択回答が先と同じ「3」か「4」。——

「春が一番人手に困る……本当はやめたい。が、コメが余っているから売れないので作れない。仕方なく転作している」(14ha層、水稲：転作：就労＝7：2：1、転作作物はバラ・ビート・燕麦、選択回答は4)。「長イモとメロンはプラスにはなる。できればコメだけでやりたいが、ペナルティを課されるとマイナスになるので、やりたくないけれどもやっている。転作強制は、新食糧法になってかえって厳しくなった」(11ha層、水稲：転作：就労＝7：2：1、転作作物は大豆・長いも・メロン・かぼちゃ・燕麦、選択回答は3もしくは4)。

ハ) 複合志向⁽¹²⁾——10戸。コメ中心だが転作が2～3割になるとの回答。「高収益作物が必要」「拡大よりは転作」など転作への目的意識が表明されている。選択回答で、「1. もはや経営の一環であり大切にしている」か、「2. 本心を言えば面倒なのだが続けていく」。本来は次の二の部類だが転作をやや縮小する予定。——「転作は手がかかる。できればコメ一本でやりたい。しかし、高収益作物を入れないとやっていけない。コメだけでは広くとダメ」(9ha層、水稲：転作＝1250：530、転作作物は小麦・小豆・長いも・ハウレン草・燕麦、選択回答は1)。「子が学校を卒業するまではこのまま。土地が出ないので拡大もできない。高収益作物で補う。できればやめにしたいが、やめると所得がない」(7ha層、水稲：転作＝8：2、転作作物は小麦・長いも、選択回答は4)。

ニ) 強い複合志向——9ケース。転作がかなりの割合になる。確定的な方針としてそれを「重視」「増やす」などの語が見られる。選択回答が「1」。「気持ちのうえで」を問うても「10対0」や「コメ一本」との言明(合計23例)が、なされない。——「転作重視。ただし水田の売り上げが5割を切ることはないように。7haは普通。増やすつもりはないから、みんなやらないうちからすぐ転換」(7ha層、水稲：転作＝7：3、転作作物はハウレン草・百合根・小豆・コスモス・燕麦、選択回答は1)。「7：3くらいが安定的。基本的に水稲だけでやるだけの所得がない。労力配分の中でコメ以外に何かをもっていれば有利」(11ha層、複合に和牛、水稲：転作+複合：就労＝1300：620：150、転作作物は小麦・百合根・ゴボウ・長いも・燕麦・小豆・野菜、選択回答は1)。

図-4は、この類型を1992年調査の結果と対比し、比較できる対象者について矢印で結んだものである。水稲志向の農家と、水稲中心でも転作を重視

する農家とは、類型的に分化しているようである。ブロックを一つとばした移行は、水稻から複合への3ケースしかない。その一例(960041番、6ha層、60代)は、この間に後継者が就農し、息子夫婦が花と稲、親夫婦が他の転作と稲という世代間分業が成立した結果である。もう一例(960016番、13ha層、40代)も、この間に後継者が就農している。このように、農家が採用しうる営農志向は、動員できる家族労働力の数に規定されている⁽¹³⁾。表2で営農志向と家族状況を見ると、水稻志向層では家族労働力が2名か3名の場合が多い。4名の4例は、10ha以上の大規模経営か(960045、969426)、中小規模なら若手が手伝い程度の就農である(960027、960042)。複合志向層では、17戸中の11戸が、親夫婦と子夫婦などの組合せで4名を確保している。本人と妻で2人という4例では、うち3例が雇用労働力で補っており(960012、960026、960044)、2例は7ha以下の「維持」か「縮小」志向で、小面積でも転作部門を大切にせざるを得ない事情がある(960026、960044)。

この分化の上への転作割当は、自主規制に対する意味づけの違いを招いている。水稻志向層では「結局はおしつけ」「強制」等の語彙が有効回答15ケース中9例に見られた。「自主規制しないと米があまり」など生産調整の論理は3例である。逆に、複合志向層では「多く作れば自分たちが困る」などの論理が18ケース中7例ある。「やむをえない」等も含めれば12が容認となる。「強制」との語彙は、ハの類型に4例見られるが、二の類型では一つもなくなる。生産調整の論理を自らのものとするか否かをめぐり、対象者たちの間にコンフリクトが発生しているようである。ただし、前者は直ちに拒絶ではなく、後者も直ちに賛同ではない。前者は現況の中での所得確保や地域利害を考慮して結局は転作を受け入れているし、後者でも現況そのものに批判的ながらその中ではやむなしと判断しているだけの場合が見られる。次節ではそうした現況への反応を見てみよう。

4. 「批判」と「自己批判」の論理

前回調査では、食管について、「堅持」が35.5%、「部分的手直し」が54.8%、「抜本改正」ないし「廃止」が9.7%という結果であった。ただし「堅持」には、「手直しは必要」だが「変わると我々のおもわくと違う手直しがなされるおそれがある。だから

注：聴取による

図4 対象者たちの営農志向の推移

堅持」といった一種の政治的判断が、強く働いていた。そして、自由回答では、有効回答25ケースの多数が、「いい地域と悪い地域を区別すべき」といった「適地適産」ないし「差異化」の論理について肯定的であり、その内容上、「手直し」を求めている。しかし同時に、他地域への配慮や自分への跳ね返り、また米価低落への懸念も見られた。「廃止」ではなく「部分的手直し」は、そういったジレンマの表現でもあった。

こうした意味の「手直し」と、現実に行進した事態は、同じではない。が、食管制度に対する評価が両義的であった以上、その廃止と新法制定後の状況に関する評価も一義的なものにはなりえまい。得られた有効回答23例を論点別に整理すると次のようになる。

a) 批判①(14例)——食管法の本来の趣旨を想起

表一2 対象者たちの営農志向と家族状況

営農志向	No.	年齢	現在の家族状況	後継者の状況	経営面積	家族労働力	家族労働力の構成臨時雇
強い 水稻 専作 志向	960002	60	本人+妻+母	長男・長女他出。	425	2	本人+妻
	960022	61	本人+妻+長男	長男に経営移譲	990	3	本人+妻+長男
	969413	36	本人+妻+長女+次女+長男+母祖+母		1032	3	本人+妻+母
	969309	58	本人+妻+長女+次女+婿+孫	婿は農外就労	777	3	本人+妻+娘
	969306	48	本人+妻+長女+次女+父+母	長男就学中	716	2	本人+妻
	960045	60	本人+妻+長男+嫁+母	長男が後継	1349	4	本人+妻+長男+嫁
	960027	65	本人+妻+次男+嫁	長男他出、次男兼業	772	4	本人+妻+次男+嫁
	960039	62	本人+妻+長女	長女就職	523	2	本人+妻
				平均	823.0	2.9	
水稻 専作 志向	969432	28	本人+妻+父+母+妹+長男	本人アールバイト	470	3	本人+父+母
	960040	51	本人+妻+長女+三女+母	長女以下就職	964	2	本人+妻
	960042	56	本人+妻+長男+次女+嫁+孫	長男手伝い程度	575	4	本人+妻+長男+嫁
	969303	54	本人+妻+息子+母	息子が就農	906	3	3本人+妻+息子
	960035	33	本人+妻+長男+次男+長女+父+母+祖母	幼少	1465	3	本人+父+母
	969308	51	本人+妻+長女+父+母	長男次男他出、長女就職	535	2	本人+妻
	969404	30	本人+父+母+妹+祖父		730	3	本人+父+母
	969426	35	本人+妻+父+母 以下NA		1160	4	本人+妻+父+母
	960024	44	本人+長男+次男+父+母	長男・次男高校生	1534	3	本人+父+母
複合 志向				平均	926.6	3.0	
	969301	50	本人+妻+次男+三男+父+母	長男他出、以下就学中	657	4	本人+妻+父+母
	960008	57	本人+妻	長男・長女他出	955	2	本人+妻
	969304	54	本人+妻+父+母	長男他出、以下他出	656	4	本人+妻+父+母
	960006	64	本人+妻+長男+嫁+孫1+孫2	長男が就農	998	4	本人+妻+長男+嫁
	960016	44	本人+妻+父+長男+長女	長男が就農	1265	4	本人+妻+父+長男
	960010	40	本人+妻+父+母+長男+次男	長男・次男高校生	625	4	本人+妻+父+母
	960032	40	本人+妻+長男+次男+父+母	幼少	1210	4	本人+妻+父+母
	960012	45	本人+妻	長女就学中	1165	2	本人+妻
強い 複合 志向	960004	36	本人+妻+父+母		720	4	本人+妻+父+母
	960038	44	本人+妻+長男+次男+三男+四男+父+母	長男以下就学中	938	4	本人+妻+父+母
				平均	918.9	3.6	
	960025	46	本人+妻+長女+父+母	長男・次男就学中	729	4	本人+妻+父+母
	960026	55	本人+妻+長男+次女+母	長男就職	715	2	本人+妻
	960044	58	本人+妻	いない	530	2	本人+妻
	960007	53	本人+妻+母+次男+三男	長男・次男就学中	1505	3	本人+妻+母
	960041	60	本人+妻+長男+嫁+孫1+孫2+母	長男が後継	603	4	本人+妻+長男+嫁
	969305	44	本人+妻+長男+次男+三男+父+母	長男高校生	1004	4	本人+妻+父+母
	960043	52	本人+妻+長男+父+母	長男が後継	1147	3	本人+妻+長男
				平均	890.4	3.1	

注：聴取および深川市資料により作成

しなからの批判が多い。「本来は農民と消費者を守るものであった。豊作や冷害があるのを国が調整する……国の赤字が減っただけでは、改善されたようには思わない」(960041番、6 ha層、60代)。「評価されるべきではない……米の需給バランスが悪い。農家の責任ではなく、国の計画の中でしっかりやれ」(960044番、7 ha層、50代)。「新食糧法は卸や商社の保護。生産者もないがしろにしている」(960035番、15ha層、30代)。これらの批判は、農政に向けられている。そのうち、とくに生産者の利害にマイナスであるとする点が強調されると、心情的には最も率直と見られる反応となる。「自由な反面、値が不安定。食管法があった方がよかった。農家にとってメリットなかった」(969305番、10ha層、40代)。「今にして思えば、保護されていた時の方がよかった」(960032番、12ha層、40代)。

b) 諦観ないし反省(6例)——が、そうして食糧の需給調整といった社会的観点が剥奪されると、自分だけが保護を求めるわけにはゆかないとの諦念や反省の論理が生じる。「仕方ない。もう日本だけの問題ではない。これは時代の流れだと思う。あった方が楽なんだけど、米だけが許されるというわけにはゆかない」(960024番、15ha層、40代)。「世の中の流れだから。保護され過ぎていた。今までのようにはゆかない」(960045番、13ha層、60代)。「廃止もいたしかたない。オレンジ・牛肉ときて、日本の農業も国際社会に照準を合わせる」(960012番、11ha層、40代)。ここで顕著なのは「国際化」や「自由化」が「世の中の流れ」であり、それに逆らってもだめだとする論理の水路である。

c) 自己批判(8例)——この方向をすすめると、「多少は自由競争も必要」との見解や、「経営感覚のない農家」に対する自己批判の論理となる。すなわち、食管廃止は、「経営手腕のない人間を淘汰するための、言ったら悪いけど一つの方策」(960010番、6 ha層、40代)。それが「当然だろう……北海道は食管法に守られていた。だが、政治が経済を守る形というのは、自由主義経済の中では、間違っているのでは」(960039番、5 ha層、40代)。「自由化反対という議論一点張りだった。自由化も必要なのではないかという議論は言い出せなかった。自由化されたらどうすればいいかを考えることもできなかった。こういうところから、経営感覚のない農家……ができるのではないか。もちろん、自由化には反対だけれど……今こそ経営者としての意識に立つこと。そういう意識改革のチャンス」(960040番、9

ha層、50代)。

d) 批判②(5例)——しかし、この理屈をもっと進めると、現状は「不十分」と写ることになる。「最初は「自由に売れる時代だ」。ふたを開けたら違う。それに伴ってすごい項目である。自由化されたといっても、結局その項目にしばられている」(969426番、11ha層、30代)。「オレは喜んだけど、だったら転作を自由にしてほしい」(969413番、7ha層、30代)。この場合の批判は、農協組織に向けられている。水稻については、「農協がこれだけは出して下さいと言う。脅し。[自由に]できそうで、できないスタイル」(969413)。転作も、「結局はおしつけ。国の前に町[町内=生産組織]、その前に農協。うちらもごねたことはごねた。が、ぼく一人で責任をとれるわけではないので……転作は何%を出せという話から始まった。いきなり当たり前のように。みんな反対した。会合中止になった……政府がやっていた時代と何も変わらない」(969426)。

これら論点は、同一対象者に複数が同居していたり(a+bが3、a+cが2、a+c+dが1、b+cが3、合計9例)、保留付き(aの2例)である。aとdが両極と思われるが、両者で鋭く問われているのは「自由化」そのものの意味である。dのように対立が発生してもいる。その対立において、国の強制だからといった説得や納得の論理を農家が失い、「コメ一本」が約束されないことへの批判の言説が農協に向けられるようになっていく点には、注意しておきたい。aにおいても、それが多数を占める基調でありながら、単独で出されるのではなく、とくに6例は対立するはずの現状の論理と同居している点に注意したい。農政批判だけでは今や現実とされた与件の否定となってしまうことから、否応なく考慮せざるをえず、その論理が語られるのであろう。こうした農家間や農家内への対立・葛藤のいわば自己内攻化が、現況における重要な現象の一つと思われる。

ちなみに、先の営農志向との関連を見ると、d単独の4例中3例を水稻志向層が占めている。複合志向も含まれるが、二の営農志向にdは一人もいない。これに対し、aを含む14例中の10例(とくにa単独の6例中5例)は、複合志向層である。ここには、小さい面積の中で転作にとりくむがゆえコメで基本を確保しておきたい7 ha以下の維持または縮小層(960044、960041)や、拡大したところが自由化の結果としての米価低迷と転作割当の同時打撃で剥奪感を強めていると思われる例(960043、969305)が見られる。cを含む8例のうち6例も、複合志向で

ある。早期からの転作重視で培われた経営感覚が想起されている例（960010）が、その典型であろう。

5. 「差異化」の論理の意味

上述のcやdの場合には、「ではどうやって生き残るのか」という反問に答えなくてはならなくなるだろう。が、そうした場合だけでなく、現況について「様子を見る」と保留する者や「残念だ」と批判する者も、この設問にはかなり明快に応じている。「自由化されてしまった以上は」という前提の下で採らざるをえない論理として、それが明確に語られるようになっているように見える。

端的に、それは「差異化」の論理と言える。近隣11農協の合併を先取りしつつ北空知の広域連合では「北育ち元気村」のブランド化がすすめられてきた。そのコメの場合が「北育ち元気村こだわり米」である。「その評価を高めていく努力。将来はやはり名を高め、内部の品質評価を高める努力」（960008番、9 ha層、50代）。「広域的なかたち……共同の力。どこもここもそういう競争をやっている……ぼやぼやしてられない」（960027番、7 ha層、60代）。こうした言明が10例あった。

だが、ここにもジレンマが現れる。「農協合併でイメージ的に悪くなる。米が混ざるから」（960006番、9 ha層、60代）。そこで、もっと「地域間格差」をつけたブランド化が主張される。「近隣には負けないという自負がある。かたよったものに見えるかも知れないが、山の米をこだわり米として売られるのはマイナス。……深川産米の追加印刷をしてラベルを貼ってもらえるとよい」（960032番、12ha層、40代）。「良質産地だけハンディをもっている」「味が勝負なのだから、それが生き残れるようにならないと……共に生きようとはできない」（960024番、15ha層、40代）。この類型の回答9例中、7例が複合志向層、6例が先のaの農政批判を含む反応の対象者である。

今回の特徴のひとつは、このように淘汰の論理としての「差異化」が率直に述べられるようになったことである。前回の聴取で「適地適産」について意見を問うと、17ケースが賛成論を立てたが、8例が「必要だがしかし」の論をも立てていた。すなわち、「線引きされたところは死んでしまう」（969302）とか「どこが良いか悪いかはさだかではない」（969305）といった配慮や、「他で作るなどとは言えない。言うとは、内地から北海道は米を作るなど言われ

る」（960032）といった跳ね返りの懸念である。また、「気の毒だとは思いうけれど」（960008）とか「弱者の人はかわいそう」（960044）とか「自分は条件のいいところにいるから露骨に言っても何だが」（960016）といった躊躇も、決して珍しくなかった。むろん、その人間的な痛みの心情や不安感に変わりはないであろう。しかし、前回には「適地でないところはどうか問題」としていた対象者でも、今回は「補いあうのではなく地域差で価格差をつけなくては……いいものを単品販売する。本州並みにはゆかないかもしれないが、そうしないと生き残る道はない」（960025番、7 ha層、40代）。

いや、今の事例の場合、それが「淘汰」というよりも、いわば「分業による共存」の論理として意味変換されていることに、注意しておこう。「南空知は量が売ればよい。安くなってもしかたない。そういう形で価格差が出てくるのではないか」（960025）。適地は単品で少量だが高価格をつける。不適地は安価だが大量販売すればよい。だから、「つぶしあいだけではなくしていかなくてはならない。産地格差があって当然。こだわり米の中にもいろいろあってよい」（960010番、6 ha層、40代）という論理にもなるのであろう。つまり、同質にならしたうえでの価格破壊競争で共倒れになるよりは良い、というわけである。また、「差異化」「差別化」で切り捨てられるかもしれない側が近隣や自己内にさえ存在する限界地であるだけに、「淘汰」をふりかざすわけにもゆかないのであろう。

こうした例は、自由化に根本的な疑問を抱く対象者にも見られる。「農業は、気候とかそういうのを見てやらなければならない。20年やっても20回しかとれない。簡単に切り替えられるものではない。そのことの理解がない。……農家が企業と同じレベルで考えられている。経済第一主義」。そう批判する農家も、「深川として考えると、他と差別化して、深川だけで売れる時代にならないとだめだと思う。努力してきたことが評価されるのでないと。いい米をとれるという自信を持っているから。差別化されたブランドで残していきたい」（960043番、11ha層、50代）。我々はこれを矛盾と考えがちである。一般に、「気候」など自然条件と、「努力」で「差別化」という業績主義の論理は、相容れないと思われるからである。が、この二つが結びつき始めているところに、今日の特徴があろう。すなわち、深川は「気候」を生かした米作りの「努力」をしてきた。それを評価してほしい。それぞれの土地でそういう「差

別化」をはかっていけば共存可能だ、と。

むろん矛盾もあろう。このように意味づけても、差異化は淘汰の力学を作動させる恐れをもっているからである。これらの対象者も、農家が「最後は利用されるだけ」(960043)とか「一次産業全滅」(960025)「食糧危機」「国の崩壊」(960010)といった事態を招くかもしれないことを、そろって指摘している。が、「差別化」は、分業による共生の原理との意味を付与されることによって、現況の中では危ういながら最悪ではないと了解されうるぎりぎりの語彙ともなっているのであろう。差異化ないし差別化の論理は、こうして今後もその浸透力を保つか、強めてゆくのではなかろうか。

6. まとめにかえて

自由化を経て、自己の経営の存廃や地域農業の存亡といった観点が、対象者たちをいっそう強くとらえるようになってきているように見える。その命題の前では、自分の考えや心情は述べられにくい。なるほど経営の実状や要求と合致しているように見える回答も多い。が、それは現況によって経営の論理を自ら取得するよう余儀なくされているのであろう。第一に、拡大や転作について、ムリを自覚しながらの言明がなされるようになった。拡大は「限度」や「難しい」といった語彙の意味する困難度が更新され、転作は「家族中がきりぎりまい」と不満でも「自分の持ち分だけは仕方ない」。第二に、強い農政批判が基調でありながら、現況が要求する論理がいっそう率直に語られるようになった。「もちろん反対だけだ」との断りのうえで「経営者としての意識」が主張される。農政に根本的な批判を持ちながら「自由競争」や一層の「産地格差」が求められる。これらを対象者の諸属性に規定された「意識」と表現しては(そうでないなら合理化や支配イデオロギーの教化による虚偽意識だと見ては)、誤認が避けられないように思う。

行為の観点から見れば、自由化とは、自発性の強制という矛盾に農民が投入されたことを意味したであろう。状況の規定は両義的になる。しかも、農家たちは、一存で自由になどできない行為について、状況を自分で説明し、自分の利害や「動機の語彙」を自分で探し、自分で合意しなければならなくなった。それら状況規定や自己利害の吟味をめぐり、農家たちは、自己内や農家間に葛藤をかかえこまなければならないとなっている。

生産調整に関する農家間の論争は、その一例と目されよう。かつて食管が表現していた論理は「自主規制」として自発化される。それをうけいられない農家は、「自由」を根拠に、批判を農協組織に向ける。対立しているのは、行為の決定権と責任の所在にかかわる「自由化」そのものの意味規定である。また、広域圏でのブランド化か一層の地域間格差かという論点对立の背景には、自己の生産物や自己利害また他地域のそれらに関する見積もり評価の違いがあろう。この不確定状態はもうしばらく続くと思われる。

「国際化」「自由化」という語彙セットも、今日の特徴である。その中に、今日における大衆説得のなされようを読みとるのは容易だろう。が、いわゆる国際化・自由化が経営にとって無視できない現実となってしまった現在、それらは現況を不本意と考える農家にも選択されがちな語彙となっている。この場合、その言説は、自由化が含意する行為者への帰責に抗する、状況じしんの強制性と行為の社会的被決定性(意志に反して従わざるをえない事情)の説明ともなりうる点に注意しておこう。ここにおいて体制イデオロギーは、行為者が適応を余儀なくされている状況を説明するための語彙を提供している。

体制イデオロギーの使用は、自己責任の回避を意味しえ、かつては「言い出せなかった」論理の出現を促進している。「差異化」「差別化」が典型である。「共に生きようとはできない」といった淘汰の論理としてのそれらは、状況じしんが強制である以上はやむをえぬ不可避の原理なのだと前提がなければ、率直には表明され難しいであろう。が、同じ語彙に対する共生の原理との意味付与は、淘汰の論理がもろ刃の剣となる「限界地のなかでの最優等地」ゆえの事情や心情の複雑さを物語るとともに、対象者たちがいかなる意味世界を選択するのかの相克過程におかれていることをも示していよう。

以上、本稿が見ようと試みたのは、現況と対象者たちとの対話過程の一端であった。むろん、ここからすぐ将来展望が導出できるとは思わない。むしろそれは、いわば自由という形の支配の下で対象者が投入された矛盾と、否応なくそれと対話せざるをえない事態にまで追いつめられた対象者たちの姿を示しているであろう。が、如上の論理は現況下で多数の農家が取得せざるをえないものであろうし、そこに含まれる対立や葛藤も多くの農民のものであろう。だからまだ展開していくだろうし、その相克は

今後を展望するうえで無視できない主題をなすであろう。相克は行為者に論理の重武装を要求する。その中で、たとえば説得に含まれざるをえない「日本全体」や「世界」への言及が現在とは別様の社会的視野に展開していくかもしれない可能性は、ひとつの鍵と思われる。

なお本稿では筆者の力量不足による単純化も多かったであろう。とりあげられなかった事実や文脈も多い。典型となる事例や論理を抽出する方法は暗模索に等しかった。いわゆる質的分析の手法と信頼度についても、引き続き検討課題としたい。

注

- (1) 社会的不安とは、問題状況下で行為の方針が不確定で揺れ動く様を言う。心理的不安ないしその集合とは峻別されているので注意されたい。Blumer (1978) 参照。
- (2) この地域を含む石狩川中流域の歴史や現状については、『北海道農業』（北海道農業研究会）の第20号（1996年）による特集が、とても詳しい。
- (3) 深川市農協は、深川市内の旧深川町＝MEM地区をカバーする農協である。
- (4) 深川市農協提供、「平成5年産米穀農協別入庫数量 平成5年11月4日現在」。
- (5) こうした組織化過程については文献リストの杉岡から第5章を参照されたい。
- (6) 本稿と立場は異なるが意識論からレトリックアプローチへの推移については一例にBilligの第1章を参照。
- (7) 先行する類別としては、文献リストに挙げる細谷他所収の伊藤による「農民生活と意識動態」が秀逸である。が、本稿では農家の「意識」と言説実践を区別し、後者を扱うのに対して、伊藤の作品は両者を含んでいる。
- (8) この論争は、震源のアメリカと異なり、日本では理論の人間観を問う性格が濃くなった。従って邦文では好適な文献がないのが実状だが、さしあたり船津を参照。ただし、船津は人間の「内的過程」を重視して理解したが、彼の立論の根拠となったBlumer (1969) の「解釈」にその含意はないと思われる。これじしん一つの争点であろう。
- (9) 行為の動機について、それを意識ではなく社会的に通用している語彙の問題に変更したのは、C.W.Millsである。ここからは、シンボリック相互作用論の一つの系譜として、公生活における言説実践ないしレトリックの社会学が誕生している。
- (10) だから、いわゆる「客観的諸条件」に對置される「主観的要因」の研究ではない。

- (11) この点を含め、前回聴取の結果については雑ながらリストの徳川 (a) (b) を参照されたい。以下同様なので逐一の言及は省略する。
- (12) 転作と複合は本来別だが、対象者も転作部門を複合と呼ぶのが一般化しており、簡便なのでそれを踏襲する。
- (13) 家族労働力は手伝い程度も含め農業に手をかけうる人数の単純合計数とした。なお共同への参加など村落関係の締結がその捻出を可能にしている場合があり、それを無視することは本来できないのだが、主題ではないので煩雑を避ける。

参考文献

- Billig, M., 1991, *Ideology and Opinions : Studies in Rhetorical Psychology*, Sage.
- Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*, Prentice-Hall. 後藤将之訳、『シンボリック相互作用論』、勁草書房
- Blumer, H., 1978, "Social Unrest and Collective Protest," *Studies in Symbolic Interaction*. 1:1-54. 船津衛、1976、『シンボリック相互作用論』、恒星社厚生閣
- 細谷昂・小林一穂・秋葉節夫・中島信博・伊藤勇、1993、『農民生活における個と集団』、御茶の水書房
- Mills, C. W., 1940, "Situational Actions and Vocabularies of Motive," *American Sociological Review*, 5:904-913.
- 杉岡直人、1990、『農村地域社会と家族の変動』、ミネルヴァ書房
- 徳川直人、1995a、「農業「危機」下における稲作農民の営農志向」、『北海道教育大学紀要（第1部B）』、第46号第1号
- 徳川直人、1995b、「農業「危機」下における稲作農民の営農意欲」、『釧路論集』第27号
- 柳村俊介、1996、『深川市MEM・イチヤン地区における近年の農業動向』、『北海道農業』（北海道農業研究会）、No.20

〔付記〕

次の方々に御礼申し上げます。数次にわたった場合もある長時間のインタビューに応じていただいた対象者のみなさん。深川市経済部農政課。また特に深川市農協営農部。北海道教育大学教育学部釧路校の社会学研究室・地域文化研究室・人間科学研究室の学生のみなさん。本当にありがとうございました。なお、この調査には、平成7年度文部省科学研究費補助金（奨励研究（A）課題番号07710130）が用いられています。